能登の里山里海再生に向けた

大学の役割

世界農業遺産(GIAHS)「能登の里山里海」実施支援事業

【協力者】石川県、志賀町、金沢市、珠洲市、輪島市、穴水町、能登町

能登

活力・資産が活性化しつつあり、これまでの伝統を維持し、これからの発展を目指すことが重要である

世界農業遺産GIAHS認定
地域活性化への期待の高まり

その達成は、恒久的な物産・観光等の
宣伝・イベントに終始させてはならない

○地域の食糧等の安定、調達と問題点、これまでの対応策の評価
○今後の対策などについてのシンクタンクの検討
○能登の担い手となる若手人材育成　が必要

大学でないとできないこと、
大学もしないとやり方」

世界農業遺産「能登の里山里海」
実施支援事業

○GIAHS実践支援調査(関係団体とヒアリング等)
能登がUNESCOに認定されたレジャーなどの検討
インフラ(道路条件)を踏まえた、地域資源調査
○国内外のGIAHSサイト(他国等など)との交流・共同調査
○研修会、ワークショップの開催
(主として、専門家、指導者向け)

県、志賀町との実施支援

金沢大学の
能登の担い手
育成の取組

2007～2011年　能登里山マイスター養成プログラム
2011～2015年　能登キャンパス構想推進事業
2012年～　さらなる取り組みを検討中

石川県の「生物多様性戦略ビジョン」
トキが羽ばたく石川を目　して　2011年3

- 里山里海　(両方がある。一体管理)
- 連携(県、自治体、大学、国連大学(OUIK)，民間、・・・
- 国際化
  - COP10
  - SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ(IPSI)
  - 世界農業遺産GIAHS)
- 地域再生(能登半島、過疎高齢化の克服)

「インフラ整備」の必要性

ハード
e.g. 研究施設、博物館

ソフト
e.g. 人材，データベース，
ネットワーク

生物多様性と金沢大学
石川県、自治体，国連大学，民間との連携

- 角間キャンパス内里山ゾーンの保全・活用(1999～)
  - 金沢大学「角間の里山自然学校」、いしかわ自然学校
- 生物多様性条約締約国会議への出席
  - COP8(クリチバ)
  - COP9(ボン)
  - COP10(名古屋)
- 日本における里山・里海評価(JSSA2007～2010)
  - 北信越クラスターレポート(石川県庁の参画)
- 「能登の里山里海」の世界農業遺産GIAHS)認定
- 能登半島の地域再生に向けた人材養成事業
  - 「能登里山マイスター養成プログラム」
  - 能登半島里山里海アクティビティ
  - 能登いきものマイスター等

教育(学生)

研究(専門知識)

地域連携
(地域再生人材養成)

都市　vs 地域　(過疎高齢化の進む地域)

生物多様性条約
保全、活用、利益の　平な配分

両立　生物多様性と経済

消滅　生物多様性 ⟺ 地域

Bottom up　地域の役割
現実、戦略

新しい　組みづくり(新コモンズ)
土地　有、法律・制度
多様な主体
都市との連　、国際化

インフラの整備(資金)
ソフト、ハード、

里山ボランティア活動の限界
(大都市圏が中心)

過疎化
高齢化

里山問題の核心
日本国内の大半を占める
地方の過疎地の活性化につながるか？

都市と農山村の交流

直接支払制度
環境保全型農林業
エコ・グリーンツーリズム
バイオマスの活用
ビジネス創出

森林再生協定

農林業の再構築・定住化促進・にぎわい

能登里山マイスター(2007～2011)
文部科学省科学技術戦略推進費補助金
「地域再生人材創出拠点の形成」

スタートの頃(2007)

- 背景:地域再生 → 過疎、高齢化、能登地震
- なぜ、能登に拠点を置くのか？
- なぜ、多数の特任教員がいるのか？
  - マニュアル化で「授業」すれば、、
- ビジネス化、・・・・
- どこに科学技術があるのか。

中間評価(2009)

- 1期生、2期生の実績
- 地域との連携、
- 継続性, 発展性
- 学内へのフィードバック

ポストマイスター(2009)

マイスターの特色

- 拠点施設。
- 学舎長、常駐スタッフ(特任教員)。
- 受講生が、研究課題をもつ。
- 特任教員(現地常駐)が、マンツーマンで指導。
- 卒業論文を書く。
- 発表会
  - 中間発表、最終発表会。
- 審査

マイスターの特色(連続講座とのちがい)

- 大学とコンサル会社
- 遅効性？　即効性？
- 総合性、専門性
- 人材養成　vs　実際の成果(目に見える成果)

ポストマイスターの　本構図

○　統体制の構築。
　ただし、イノベーション,グレードアップが必要
○大学と地域との相　主体
　1.役割分担、人材　保、経費負担
　2.地域自　体、住民の自主性、ガバナンス
　3.国際化　"World Reach Out"
　4.大学コンソーシアム

能登の将来を担う人材

人材養成の　業

里山マイスター
受講生, 若手スタッフ

地域社会

金沢大学の学生、教職員

3.11の教訓

- 日本社会:技術の過　、風土を忘れる
  - 西洋近　の個人主義:いま、ここ、わたし
- エコロジカルフットプリント(生態学的足跡)
  - インターネット　配の暮らし　vs　近所へ豆腐を買いに行く
  - オール電化
  - ロハス (LOHAS, Lifestyles of health and sustainability)
- 町づくり
  - コンパクトシティ
  - 「拡散都市」　都市と田舎の区　なし
  - スプロール化　(urban sprawl)
  - モータリゼーション

地域づくり支援講座(まとめ)

- 自　がいちばん　強になった
- 必要に応じて、　強する
- 興味の範　を広げる
- ネットワークを広げる

学
朋(　)

- 対応範　, 可能性を広げる
- 試してみる
- チャレンジする

かわる
かえる

- なぜ、国際化？
- 　界(　間)は広い

能登から　て、
能登に戻る

- つづける

私の軌跡

- 1970～1976 農耕地～ブナ原生林の食葉性テントウムシの長期個体数変動
- 1977 金沢大学着 。
- 1980～1986 スマトラ自然研究 (Sumatra Nature Study)に参加
  - リーダー：川村 晃教授（ 都大学・霊長類研究所）
  - 人材養成（日本・インドネシア 国の若手研究者）、長期現地滞在サンドウィッチ・システム，研究体制つくり
- 1989～現在 インドネシア各地における昆虫類の長期個体群動態
  - インドネシア若手研究者の支援（留学）
  - スミソニアン熱帯生物学研究所（米国、パナマ）への長期滞在
- 1999～現在 里山里海プロジェクト

自然（cf. 環境）
フィールドワーク
現地（地域）

なぜ、いま地域か？

- 国際情　の変化
- 頻発する大災害
- 日本の「　滞、劣化」

大学を変える

大学の役割

共通の目標
検証の現場

社会・国の崩壊、自然の崩壊

国破れて、山河あり
山河破れて、国あり

○激甚災害
○過疎高齢化による、ゆるやかな衰退

能登の「里山復権」

自
チカラ
ガバナンス

自ら構築

あきらめ
人　せ

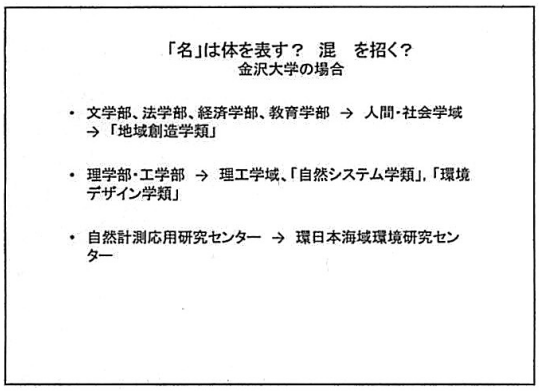
自治（自立）、
自己管理

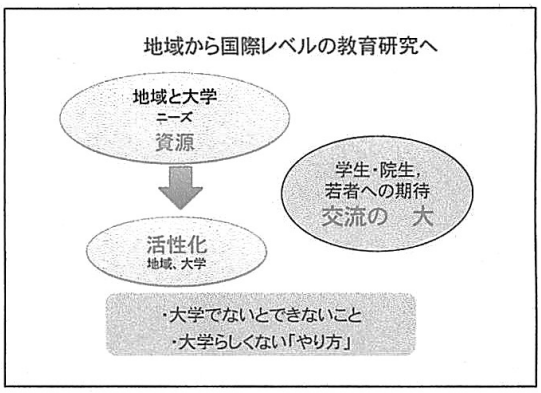
ポストマイスターの　本構図

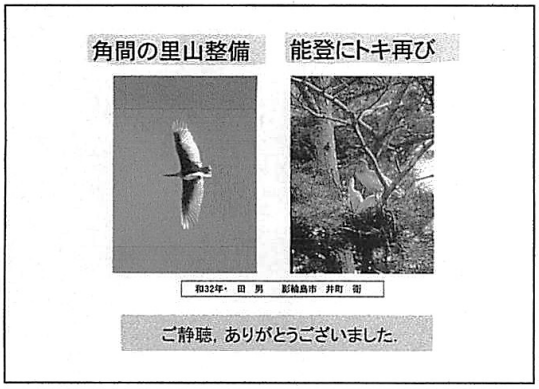
○　統体制の構築。
　ただし、イノベーション,グレードアップが必要
○大学と地域との相　主体
　1.役割分担、人材　保、経費負担
　2.地域自　体、住民の自主性、ガバナンス
　3.国際化　“World Reach Out”
　4.大学コンソーシアム

大学の役割

- 日本は、科学技術立国（サイエンス）
- 地域が主役
- 大学は社会のために
- 地域　生をになう、人材・拠点つくり
- 大学は、地域と手を携えて、・・・・・


「名」は体を表す？　混　を招く？
金沢大学の場合
・文学部、法学部、経済学部、教育学部 → 人間・社会学域 → 「地域創造学類」
・理学部・工学部 → 理工学域、「自然システム学類」, 「環境デザイン学類」
・自然計測応用研究センター → 環日本海域環境研究センター


地域から国際レベルの教育研究へ
地域と大学
ニーズ
資源
活性化
地域、大学
学生・院生,
若者への期待
交流の　大
・大学でないとできないこと
・大学らしくない「やり方」


角間の里山整備
能登にトキ再び
和32年・ 田 男　彩柚島市 井町 街
ご静聴, ありがとうございました.

「地域におけるボランタリーな生き方–地域学への期待」（当日配布レジュメ）

栗原　彬

1.　エッジに立つ

1.1.　エッジ（切っ先、先端）とは、排除と生存に関わる問題群を孕んだ場所。受苦の場所であると同時に可能性の存在する場所

1.2.　近代社会の排除と生存のエッジ

1.3.　市民社会の内部およびグローバルに、エリート層と下層労働者層の２極分化。新しい貧困層。重層的な社会的排除。つながりの分析・貧困。

2.　「でも、いのちがあって、生きています」–いのちの形を見出す

2.1.　大塚愛さんは福島県川内村の山中できれいな小川と出会う。1999 年に小屋をつくり、ランプと薪の自給自足の生活を始める。４年間里の大工について修行を積み、連れ合いの建築士と新居を建てる。井戸を掘り、太陽光パネルを張り、２人の子どもを生んだ。3.11 福島原発爆発。原発から 24 キロだったので家族で岡山に避難。子どもたちを放射能から守る「子ども未来・愛ネットワーク」を始まる。3.11 以前から脱原発を願って始めていた「イマジン」でフラを踊る「アロハ DE ハイロ」を岡山でも再開。大塚さんは言う。あの場所を失ったことは、いのちの半分を失ったようなもの。「でも、いのちがあって、生きています」と

2.2.　失われたもの、あらゆる受難のいのちへの祈りと記憶／記憶のトランスフォーメーションとしての、いのちの形の歩み

2.3.　いのちとは、他者（自然、動物、子ども、人間、死者など）の声に応答して立ちあがり（当事者起点、応答可能性）／身体、手の技のメディウムを介して（アート、生の技法）／共助の関係を紡ぎ出すこと（共助、共生）／共助・共生の構築がすべてのいのちに向けられるとき、もう１つの公共空間が拓かれ、「システムの政治」にあらがうもう１つの政治の圏域が拓かれる（もう１つの公共性、もう１つの政治）

2.4.　当事者・市民のボランタリーな生き方は４つのいのちの形の現れ
①当事者・市民起点　②共助・共生　③アート　④もう１つの公共性、もう１つの政治

3.　地域とは／市民とは

3.1.　地域とは、ある場所に共に暮らす人々と生命系のことであり、その生の営みの総体である（地域の形成概念）
問い：放射能から避難した人々（難民）にとって、地域とは何か
①避難先が新しい地域　②サテライト地域　③場の記憶で結ばれたネットワーク
④待望する地域　⑤難民のいる遠いところ

3.2.　市民とは、ボランタリーな生き方をする人々のこと
①デモをする人々（小田実）　②日常生活を自発的に営む人々、すなわち自発的に暮らす、働く、ともに楽しむ、戦う人々（小田実改訂版）　③②＋自治と共生とつながりを志向する人々　④③＋自ら情報を集め、自分で考え、公共空間に参入する

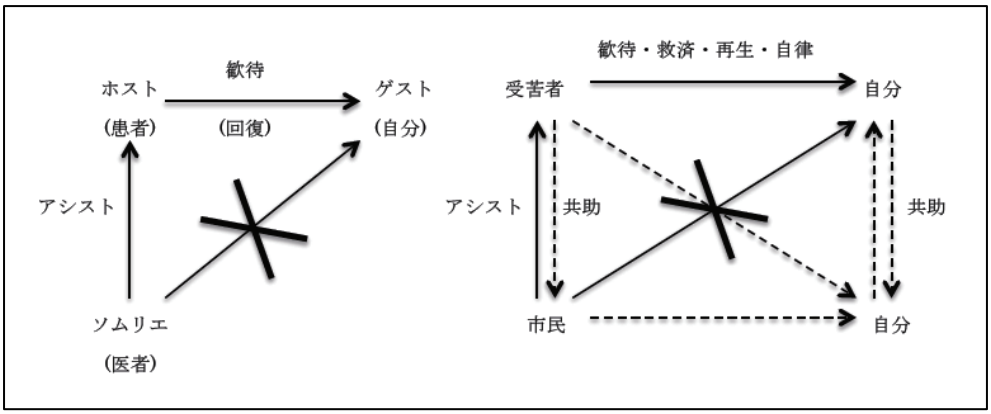
人々
問い：「私（山形県高畠の農民詩人　星寛治さん）は市民か」

4. 3.11 というエッジに露出した、社会的排除と生きにくさを生む市場原理優先の「システムの政治」（S.ウォーリン）を見定める
①生産力ナショナリズムとグローバル市場化　②政治支配における全体主義と生活様式における全体主義（藤田省三）　③二重の植民地主義　④隠蔽の政治　⑤軍事化の政治　⑥社会的格差と難民を生む統治の構造的連続性（3.11 以前と以後、またグローバル化に）

5. 「自分のことだけ考える生き方はでぎね」（吉田正耕さん）−地域におけるボランタリーな生き方

5.1. 生きにくさの現場を生きる当事者・市民は、「溜め」（金、家族、友人、自信）と「目地」（未決の領域、あそび、間、つながり、安全）をつくることが喫緊の課題

5.2. 呼びかけに応答して、受苦者のほとりに立ち、共生のハビトゥス（慣習行動）を身体に拓く／「プラグを抜く」（I.イリイチ）ハビトゥスが社会を変える
・ボランタリーな立ち方：ソムリエ論



5.3. 地域づくりは当事者・市民起案で
・岩手県大槌町：町内 9 地区ごとの協議会、若者のプラットフォーム「おらが大槌夢広場創造委員会」による住民会議、共同の設備づくり

5.4. 市場原理とは別の生き方、もてなし（歓待、贈与、互酬）によって営まれる暮らし方を大きくしていく
・贈与（歓待）／互酬／再分配／市庭//市場交換（K.ポランニイ）
・市場原理が支配的な世界に暮らしつつ、共生的なものを「隙間にねじ込み、ぐわっと拓く」（ホームレスアーティスト　いちむらみさこ）

5.5. 当事者・市民はヴァナキュラーなものによって共生を構築する
・ヴァナキュラー（vernacular 地に着くこと／共に生きること）「互酬によって営まれている暮らし」（I.イリイチ）

・高畠に見るヴァナキュラーな共生の形：結いと講、延長家族、他者の歓待、異交通、草木供養塔、耕す文化と手仕事、自律する「百姓」、有機農業
・「までい」（飯館村）／「舫い」（水俣）

5.6.　当事者・市民は、分断された人々と生命系をアートでつなぐ
・当事者起点、共助、つながり、出会いと異交通、離脱と関係の物語、ブリコラージュと手仕事、身振り、地域に根ざしかつ地域を超える

5.7.　ボランタリーな生き方は、公共性の概念を組み替える
①公論：コンビビアル（共歓的）な協議、デモ、すわりこみ、占拠などフィジカルも
②公的決定：当事者・市民起案、決定過程への参加
③公益：「成長」から「生存」「安全」「共助・共生」へ

5.8.　当事者・市民のボランタリーな生き方の課題は、政策課題と切り離せないクルマの両輪をなす
・政策課題：東日本の復興。相対的な貧困率の引き下げ。脱成長・脱近代モデルの構築。持続可能なマクロ経済の構築。ナショナル・ミニマムの構築。低所得者層の暮らしの重点的回帰など

5.9.　１つの地域の生活には、無数の遠い地域の人々の生活が交差して、グローバルな関係のネットワークを構成している。日本の市民が遠く、小さく、弱いところから収奪して、グローバルな富を占有して生きている限り、そこに生起する問題に責任があり、遠いところとつながり直す責務がある

6.　何のための地域学か

6.1.　ひとりひとりの生の充実、生きやすさ、つながりの実現を空間的枠組みを通して考えることに地域学の独自性がある。もう１つ、時間軸上のつながりと共生も

6.2.　地域学の視点４つ
①課題解決に向けた＜分析的・客観的・構造的視点＞
②地域に生きる生活者として、ヴァナキュラーな生活空間と「生活の知」に着目する＜生活から考える視点＞
③「わたし」の「いま、ここ」から考える＜わたしへの再帰的視点＞
④人間を移動する存在と見て、人と地域との関係を考える＜移動する視点＞

6.3.　田中正造の提唱した谷中学から地域学を考え直す
・谷中学は、谷中村民が自治と共生に充ちた生を創り出すために、自ら構築すべき学問として提唱された。排除と生存のせめぎあうエッジに立って、根源的な思考と実践理性、倫理と政治、探求と教育が求められた
・田中正造の残した信玄袋の中身：聖書（神、隣人愛、共生、倫理）、明治憲法（自治、民権）とマタイ伝（義）の合本、河川調査報告書（公共性、環境、暮らし）、小石（美、楽しみ、アート）、川のり（自然と共生）

6.4.　当事者・市民を研究の客体でなく、研究の主体として構築するところに画期的な新しさがあり、可能性もあるのではないか

6.5.　地域学は、生きにくさを生きる当事者・市民のボランタリーな生き方に肩を並べる

「課題責任」（緒方正人）がある

6.6.　「システムの政治」の統治と支配の構造を批判的に洞察し、それからの離脱の戦略を含む、対抗的なつながりと共生のポリティクスの次元を構築すること

6.7.　「善なるものが制度化を通して最悪なものになる」（I.イリイチ）

・限界設定の逆越境、引き返し

6.8.　「だれのための地域学か」という問いとナラティブ：分析と記述／散種と体系化

・きだみのる『にっぽん部落』（岩波新書の再読）